
姫と竜

久保 徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と竜

【Nコード】

N1979A

【作者名】

久保 徹

【あらすじ】

平和な町に住むある兄と妹。二人の平穏な日々を引き裂くように起きた、世界規模の地震をきっかけに、二人は《四竜伝説》の《宿命》に飲み込まれていく

01 四竜伝説

〔王立図書館所蔵『四竜伝説』より抜粋〕

世界を創造せし四体の竜あり

名を、金竜、銀竜、光竜、闇竜

四竜は天地を創造した後、命あるモノを創造した

そして最後にそれらを統べる者として ヒト を創造しようとした

創造された人々は数を増やし、街を作り、徐々に繁栄を深めていった

急速に発展する彼らを見て、銀竜が言った

「このまま人間が増え続けると、我らに害を成すことはないだろうか」

これをきっかけに、四竜は意見を違えて分裂する

「このまま見守るべき」

と言う金竜、光竜に対して銀竜、闇竜は――

「一度人間は滅ぼし、最初から造り直すべき」

として対立、溝は修復不可能となり、ついに衝突した

大気を燃やし、大地を砕き、海を裂いた戦いは七日七晩続いた

戦いの末、銀竜、闇竜は敗れ絶対零度の氷塊に封印された

しかし、激しすぎた戦いに巻き込まれ、人間は世界から姿を消した

金竜は戦いで深い傷を負い、光竜と共に新たな人間を創造した後、
長い眠りにつく

残った光竜は万が一に備え、竜の力を持った人間を創造した

その後人間に姿を変え、新たに創造された人間達の国で、初代国王として彼らを導いていった

02 町の守護神

多くの人々が行き交い店舗の軒先には様々な商品がならび、活気に満ち溢れていた昼間の街

逆に夜の街は出歩く人もなく、敵から人々を守る外壁の上では、鎧と槍や剣で武装した兵士が行ったり来たりしている

そんな街を見下ろす丘の上に人影がある

月明かりに照らされたその姿は、黒っぽい服に身を包み、腰には一本の剣を携え、白髪の長い髪が夜風に吹かれ踊っている

「ここではない もっと東か……」

小さく呟いたその声は女性の声であり、その口調はなんとも落ち着いていたものだった

その蒼い瞳で東の方向を見据えると、そのまま静かに広がる闇へと消えていった

「おい！そっちに行つたぞ！」

「囲め囲め！槍持ったか！？」

東の果ての町、ハテノタウン――

この町は鍛冶技術で発展した町で、ここで作られた武器防具は、国の騎士団でも採用されている程だ

普段はいたる所からハンマーで叩く音が聞こえてくるが、今日は代わりに男達の怒号が響き渡る

とゆうのも、町に魔物が一匹侵入したのだ

「よし！追い詰めた！」

ついに魔物は袋小路に追い詰められた

その魔物は大きな犬のような体に、尻尾が四本あり、鋭い牙と爪を持っている

追い詰められても、赤く鋭い目で睨み、大きく口を開いて吠えながら抵抗している

「この！」

囲んでいた男の一人が魔物に向かって槍を投げ付けた

しかし易々と躲され、槍は地面に突き刺さる

「今だ！」

一瞬のスキをついて、剣を持った男が斬り付けた

魔物は腹部を深く斬られ、空に向かって大きく叫び倒れた

それを見た周りの男達から安堵と歓声が沸き上がる

だがそんな彼らの足元で、魔物の体がピクツと動いた

「まだだ！動いた！」

その声に皆が魔物に目をやると、体中に黒いシミのようなものが広がっていく

シミが全身を覆うと、魔物の体は《変異》を始めた

「こ、こいつ！《カオス》だったのか！」

「まずい！みんな早く逃げろ！」

再び逃げ惑う人々

《変異》を終えた魔物の体は、以前のそれとはまるで別物になっていた

人間の身長の倍近くに、爪や牙はさらに鋭く大きくなり、背中には炎が奔っている

「騎士団に連絡は！？」

「したけど、とてもじゃないが間に合わない！」

その間にも変異した魔物は、炎を吐きながら町の中心部へ向かっていった

「おれ達じゃ手に負えない あいつはどこだ！？」

町の南にある武術道場 格闘術、剣術、槍術など様々な武術を教

えている大きな道場だ

「大変だ！カオスが出たぞ！」

「カオス？侵入した魔物がか？」

「そうだよ！今町の中心部に向かつてる！あいつはいるか！？」

息を切らせて入ってきた男の言葉に、道場内はざわつき出した

男はそのまま階段を駆け上がり、二階の格闘道場に駆け込んだ

ここに《あいつ》はいるのだ

「竜貴！いるか！？」

そう叫ぶ男の声に一人の青年が振り向いた

年令は二十歳前、十七歳くらいか

栗色の髪に黒い瞳、軽装で身を包み、手には木刀を持っている

「どうしたんですか？魔物が入ったんでしょ？」

「説明はあと！」

「え……うわ！」

「タツキ！終わったらすぐ戻れよ！」

タツキは師範の言葉に手を振って答えながら、手を引っ張られ階段をバタバタと降りていった

「一体なんですか！？」

「カオスだったんだよ！ほら！」

外に出て男が指差す方を見ると、建物の間から炎が吹き上がり、カオスと化した魔物が見えた

「まいったな おれの剣は磨ぎ直しに出してるんだけどなあ」

そう言いながら準備運動をする

軽い準備運動を終えると、魔物に向かって走り出した

魔物の進路上にあった家や建物は破壊され、火事も起きている

魔物を止めようと大砲で攻撃するが、たいしたダメージにもならず、逆に前脚の一振りで一掃されてしまう

「くそ……タツキはまだか!？」

魔物が再び前脚を振り上げた

もうダメかと目をつむり顔を背ける

次の瞬間、ドゴツと鈍い音がした

恐る恐る目を開け顔を上げると、自分の前に人影が立っている

その向こうには横倒れになっている魔物の姿

「おまたせ」

前に立っていたのはタツキだった

彼の右拳の先からは細く煙が出ている

要するに彼はただ単にグーで殴っただけなのだ

もちろん常人ではあそこまで吹き飛ばすどころか、殴ることすら出来ない

タツキは子供の頃から大人と比べても身体能力は高かった

武術の才能にも恵まれメキメキ上達していった

そんなタツキはいつの頃からか、町に侵入した魔物を退治するようになった

それは通常の魔物の何倍もの力を持つカオスも例外ではない

守護神とも呼ばれる彼だが、その時すでに《宿命》が迫っていた

03 姫と竜

結局、魔物はタツキの手で倒された

倒れていた跡には白い粉が残されていて、ホウキを持った人達が丁寧に集めている

魔物の体から出たとは思えない程純白に輝くその粉は、様々な病に効く薬として重宝される

「ありがとうタツキ、これではらくは薬に困らないわ」
「どういたしまして」

お礼に訪れた女性に軽く頭を下げる

女性を見送ると、ふと考えた

（今週に入って三体目、町に出たのは初めてだ）
カオスはそうそう頻繁に出るものではない

以前は月に一体、多くて二体、町から離れた場所に現れる程度

中央の騎士団に報告すれば、すぐに専門の部隊が対処する

しかし最近では、騎士団でも手に負えない程急増している

タツキはそんなことを考えながら道場に戻った
ドアを開けて中に入ると、横から声をかけられた

「兄貴！」

「姫乃、どうした？」

声をかけたのは、二つ下の妹ヒメノ

ドスドス足音をたて、いきなり凄い迫力で迫ってくる

明らかにご機嫌ナナメ

「カオスとやり合ったんだって？何でアタシを連れてってくんないのさ！？」

「何でつてお前、危ないだろ」

タツキを壁ぎわまで追い詰めても勢いは止まらない

「剣も格闘も最上級生のグループでやってるんだ！アタシが勝ったことないの兄貴だけだよ！」

ヒメノはその名前と正反対の男勝りな女の子

剣と格闘はかなりの実力で、槍はどうも苦手

いつかは一人でカオスに勝ちたいと願っている

故に町の近くにカオスが出た時は、一緒に行きたいと頼むがタツキは許さない

「確かにお前は強いよ でもいつも言ってるだろ？危険な目に合わせたくないんだ」

タツキはヒメノの肩にポンと手を置いて言った

ヒメノが強いと言っても一般人と比べての話

とてもカオスと戦えるものではない

「いつもそう言って！もういいよ！」

ヒメノはタツキの手を払い、走り去ってしまった

「……ふう」

走り去るヒメノの後ろ姿を見ながら、軽く息を吐く

「タツキ」

「あ、師範　すみません、騒がしくて」

「いつもの事だろ」

師範は水の入ったコップを差し出した

コップを受け取り一口飲んだ

「あいつ……ヒメノな、稽古が終わっても一人残ってやってるんだ
よ」

「はい、わかってます」

彼女の手のひらや足には、マメや傷がいくつもあった

タツキはそれらを見るたびに、嬉しくもあり心配でもあった

「ヒメノにはおれに何かあった時、子供達を守ってほしいんです」

今までは運がいいだけで、いつタツキでも勝てないような力オスが現れるかわからない

ヒメノを連れていけないのはその時のためでもあった

ヒメノは自分の部屋で剣の手入れをしている

（次は絶対、兄貴より早く……）

数日後――

タツキは午前中の稽古を終え、一階の食堂で好物のうどんを持って席についた

「いただきまーす」

まずダシの効いたツユを一口すすり、箸を持ってうどんを口に入れようとした

その時――

「タツキ！大変だ！」

突然の大声に驚き、机に足をぶつけた
うどんは箸と共に床に落ちている

「なんだよ！？うどん返せ！」

タツキはちよつと涙目で振り向いた

「カオスが出たんだ！」

「……あのやろう」

恨みの対象はすでにカオスに向けられているようだ

「うどんは後でおごるから！それよりヒメノがいないんだよ！」

「え？」

「部屋に行ったらあいつがなくて、剣もなかった！」

それを聞いてタツキはガタツと立ち上がった

「どこに出た！？」

「ルクス遺跡の近く」

タツキはものすごい勢いで道場を飛び出して行った

「気を付けろよ！前のよりでかいらしい！」

後ろから聞こえる声をしっかりと聞きながら猛然と走った

剣を持ったヒメノの行き先、そんなものは分かりきっている

「あのバカ……！」

タツキは町の南西にあるルクス遺跡へ急いだ

04 「ありがとう」

ルクス遺跡――

《四竜伝説》の時代からあるとされる、古の遺跡の一つ

周りをうすつうとした森に囲まれ、遺跡の頂上部分だけ顔を出している

普段は静かなこの森も今日は様子が違う

地響きと共に森の一角から土煙が上がった
驚いた鳥達が逃げるように一斉に飛び立つ

「あそか……」

ヒメノは木の上に登り煙の上がった方を見ている

そして腰に下げた剣を握り締め、木から飛び降り走りだした

二時間前、この森に狩りに来ていたハンターが撃ち殺した魔物

運悪くカオスの因子を持っていたこの魔物は、トップクラスのパワーを持つ《サイクロプス》へ変異を遂げた

その一撃は人間一人など苦もなく吹き飛ばす

「こいつを倒して、兄貴に認めさせる！」

ヒメノは無謀にも、木々を薙ぎ倒しながら進むカオスの目の前に飛び出した

「かかってこい！」

両手で剣を構え叫ぶヒメノをカオスはゆっくりと見下ろした

ヒメノが剣を握る手に力を込めた時、カオスの巨大な拳が真横から襲う

とつさに後ろに飛び直撃は避けたが、風圧で数メートル飛ばされ、地面を滑った

なんとか手をつき素早く起き上がる

「なんの、これくらい」

一気に間合いを詰め、戻りの遅い腕に乗り跳ねるように背中に登った

右手の剣を逆手に持ちかえ、高々と振り上げると……

「これならどうだ！」

そう叫びサイクロプスの背中に剣を突き立てた
「オオオオオオ！」

刀身が半分ほど刺さった所から血が吹き出した サイクロプスはヒメノを振り落とそうと激しく体を揺らす

「うわっ！」

ヒメノは剣にしがみつき、落とされまいと必死にふんばっている
だがサイクロプスはさらに体を揺らし続ける

ヒメノは耐え切れず、握った手を離してしまった
そして背中から地面に落ちた

「うっ！」

なんとか起き上がろうとするが、背中を強打したため呼吸がまま
ならず咳き込んでいる

そこに痛みにもがくサイクロプスの腕が飛んできた

「まずっ……」

ヒメノの体をものすごい衝撃が襲った
体は軽々と宙を飛び、さらに木に激突して止まった

「う……あ……」

地面に落ちて痛みと苦しみでうずくまる

口からしたたり落ちる血が、地面に点々と赤い模様をつける

（体が、動かない……やっぱアタシには倒せない……？ 兄貴には追
い付けない……？）

どうにか体を起こし、木に寄り掛かり座った

呼吸が荒く、体は依然として動かない

落ち着きを取り戻したサイクロプスが、背中に刺さった剣を抜き、
ゆっくりと近づいてくる

そしてヒメノの目の前で立ち止まり、攻撃モーションに入った

（兄貴……）

心の中で、自然と兄を呼んだ

ドスンッと音がした

続いてサイクロプスの叫び声

自分が生きていることに驚きながら顔をあげた

ヒメノの目に映ったものは、右腕をおさえもがくサイクロプスと
右腕の先、そして地面に刺さっている見慣れた一本の剣

（これって、まさか……）

「大丈夫か？ヒメノ」

聞き慣れた声

怒る様子もなく、ただただ妹の身を心配する、優しい兄の声だ

「兄貴……なんで」

「なんでじゃないよ全く　どんだけ心配したと思ってんだ」

タツキはヒメノに背を向けたまま、剣を引き抜いた

「動けるか？ちょっと下がってる」

「うん」

「お、えらく素直だな」

「うるさい」

左腕が、折れてはいないがヒビは入っているかもしれない
他にも体中に痛みが走るが、木に片手をつき立ち上がった

「隠れてろ、すぐ終わるから」

「……うん」

（すぐ終わる）

兄に追い付き、追い越したいと思う妹にとって、その言葉は兄と
の力の差を再確認させるものだった

ヒメノは少し離れた大きな岩の陰に移動した
するとそこに、タツキの後を追って来た道場の師範がやってきた

「ヒメノ、大丈夫か！？」

「師範……アタシは大丈夫です それより兄貴は……」
「心配ない 今あいつは怒ってるからな」

タツキは片手で剣を持ち、ゆっくり歩き出した
目が合ったサイクロプスは、一歩後ずさる

「この森は、子供の頃よく二人で遊んだんだ」

タツキが一步近づく度に、サイクロプスは一步遠ざかる

森がざわついている

あまりの殺気に森全体が震えているかのようだ

「おれ達にとって大切な場所なんだよ」

その言葉、その眼差しから、込み上げてくる怒りが伝わる

ヤケにでもなったのかサイクロプスが握った拳を振り下ろした

激しい衝撃のその直後サイクロプスの残った左腕が吹き飛んだ

傷口を押さえる腕はもう残されていない

奥歯がガチガチ音を立てる

「おれが恐いのか？ならその恐怖を頭に叩き込んだままあ！消えろ
」！
」

タツキは剣を斜めに振りぬき、サイクロプスの体を斬り裂いた

サイクロプスの体は白く色を変え、崩れた

「あれが、兄貴……？」

ヒメノの目に映っている兄の姿は、自分の知っている兄ではなかった

兄が強いのは知っている

周りの人間とは明らかに違う、異質な強さ

だが目の前で見たその強さは予想を超えていた

「大丈夫か？ヒメノ」

そう言って手を差し伸べる兄は、いつもの兄に戻っていた

ヒメノは差し伸べられた手を握る

「大丈夫……ありがとう」

05 あの日

夢を見た――

おれが四才、ヒメノが二才の時に死んだ両親の夢だ
久しぶりに見た

夢を見たといっても、よくは覚えていない

ただ一つだけはつきり覚えている場面がある

雨の中、おれ達に覆いかぶさるように倒れている両親の姿、その
腕の隙間から見えた人影

手にした剣からしたたり落ちる赤い雫

そして最後はものすごい雷で目を覚ます

「あの夢か……久しぶりだな」

両親は二人共、騎士団に所属していた

父親は一級白帥士、次期団長候補と言われたほどの人

母親は一級赤帥士、女性では数少ない一級の称号を持つ女傑

その為二人が実家に帰れる事はほとんどなく、おれ達は祖父母の

もとで暮らしていた

あの日は久しぶりの休暇で、家族四人で出掛けていた

帰り道の途中、突然父が叫んだ

（逃げる！）

そこから先は覚えていない……いや、見てはいたが思い出したくないだけなのか

気付いた時には、ヒメノと一緒に祖父母の家のベッドで寝ていた

ベッドの周りには心配そうに顔を覗き込む、知り合いや親戚

その後ろには泣いている人もいた

今だに状況がわからず困惑したまま、数日後両親の葬儀を迎えた

《死》が理解できないおれ達は、なぜ二人はいなくなったのかと、そればかり考えていた

その頃からだったか

かけっこで負けなくなった――

腕相撲で負けなくなった――

後ろから声をかけられる時、なんとなく気配がわかるようになった――

しかし周りの人と違うこの体を疎ましく思うことはなかった

逆に、両親がいなくなったことで、いつからかこの力でヒメノを守っていいと思った

06 去りゆく静かなる星の大海

居候している部屋を出て階段を下りていくと、道場から声が聞こえてきた

「ヒメノか、早いな」

道場に入ると一心不乱に拳を突き出すヒメノの姿があつた

あれから一週間、心配された骨にも異常はなくヒメノは稽古が出来るまで回復している

「あ、兄貴 おはよ」

「ああ、おはよ」

「そうだ、久しぶりに相手してよ」

「今日は大将の所に行くんだ いいのが出来たからって ごめんな」

「ちえー」

ヒメノは服の袖で汗を拭き、残念そうに言った

道場から少し離れた所に、この町の代名詞である大きな鍛冶屋通りがある

ここで作られた武器防具は最上級とされ、世界中で需要があるのだ
タツキご用達の鍛冶屋もその通りある

「おはよー、大将ー？」

店の中に入ると、剣や槍、鎧が所狭しと並べなれている

どれもこれも一目見れば、高い性能を持っていることがわかる

「大将ー？おーい」

タツキの呼び掛けにも反応はない

辺りを探していると、奥の方からなにやら音が聞こえてきた

カウンターの横にある扉を開け、一度外に出てさらに正面の扉を
開ける

扉の上には《炉室》と書いてあった

「大将？いる？」

そう言つてゆっくり扉を開けると、中からものすごい熱気が溢れ
だしてきた

「あつっ……」

一瞬躊躇したものの、覚悟を決めて中に入る

激しい熱と火の粉の中で、赤と言うよりは夕日のように熱くなっ

た鉄を何度もハンマーで叩いている

その度に火花が散っている

タツキが来たことにも気付かず、ハンマーを振り下ろすこの男が
《大将》である

「大将！」

「ん？おお、タツキ！いつ来た？」

「さっきからいたよ」

「さっきから？そうかあ、すまんすまん」

立ち上がった大将はまるで壁のようだった

腕は丸太のように太く体は無駄のない締まった体をしている

白髪之交じった髪を後ろで縛り、もみあげとヒゲが繋がっている

「聞いたぞ、ヒメを守ったって？よくやった！」

大きな手でタツキの頭を掴み、ワシワシとなでた

（ち、ちぢむ……）

「た、大将？それよりアレ出来たの？」

「おお、そうだった」

そう言つと大将は壁にかけてあつた一本の剣を持って来た

タツキが使っているものより、一回り小さいものだ

「ほれ、これだ」

タツキは剣を受け取ると、一度大将の顔を見る

大将が小さくうなづく

そして少しだけ剣を抜くと、窓から入る光が反射して、タツキの顔が照らされる

「自信作だ」

その声を聞き、一気に鞘から引き抜いた

「これが……」

光輝く刀身は剣先に向かうほど、独特の曲線を持ち、片刃の剣だった

「どうだ？倭国の剣を真似てみたんだが」

「へー、倭国の剣か」

「切れ味は保障するぞ」

「ありがとう、大将！」

剣を鞘に収めると左手に持ち、店を後にした

その頃には、通りの店はほとんど開店し、傭兵や商人などでにぎわっている

タツキは寄り道することなく道場へ帰っていく
「ん？あれは……」

その途中、歩くスピードがゆるんだ

視線の先には、建物の壁に寄り掛かる、白髪で黒い服の女性がいた
腰には剣を下げている

「町の人じゃないな 傭兵かな」

しかしタツキは知っているような、会ったことがあるような不思議な感じがしていた

「あれ？」

タツキの前を数人が通り過ぎると、その女性はいなかった

見間違いかと思いながら再び歩きだした

「ただいまあつと」

道場に戻るとすでに生徒達が集まっていて、稽古の準備をしていた

「あ、兄貴 大将のところで何してきたの？」

「ん、ちょっと両手出してみな」

ヒメノは首をかしげながらも、言われた通り両手をだす

「誕生日、おめでとう」

後ろに隠していた剣をヒメノの手に乗せた

「……誕生日？」

「お前、今日で十六だろ？約束通り大将の剣だぞ」

「え……ええええ！？」

驚きながらも口は笑っている

十六才の誕生日に大将の剣をプレゼントする、とゆう約束をしていたのだ

ヒメノは自分の誕生日をすっかり忘れていた

「そのサイズならお前でも使い易いだろ……って聞いてないな」

ヒメノは目を輝かせていろんな角度から食い入るように、剣を眺めている

「これはおれが部屋に置いとくから ほら、稽古始まるぞ」

「あ、うん 兄貴ありがと！」

笑顔でそう言うと、足取りも軽く稽古に向かった

「こいつを使うようなことがなきゃいいけどな」

その日の夜――

町を重苦しい暗やみが包む中、町の中心にそびえる時計塔

その先に白く輝く満月がきた時、突然人影が浮かび上がった

そのシルエットを見ると、あの白髪の女性のようにだ

「時間がない、もうすぐ始まってしまう」

そう……この時すでにこの世界には、あまり時間が残されていない
かったのだ

もうすぐ《終わり》が始まろうとしていた

（なんだ、この感じ……何かが来る……？）

同じ日の休憩中タツキは、外に出るなり妙な違和感を感じていた
なにかがベタベタとまとわり付くような、嫌な予感がしていた

その嫌な予感を残したまま、夜を迎えた

「……」

眠れないタツキは屋根に上がり、いつもと変わらない星空を見上げていた

静かに広がる星の海をもつてしても、タツキの心を鎮める事は出来ない

「なんだよ、この感じは……くそっ」

その時、タツキを包んでいた月光に突然影が落ちた

さっと振り返ったタツキは、目を見開いて硬直する

さっきまで誰もいなかった場所に、誰かが立っていた

「ようやく見つけたぞ」

「な、なに……？」

顔を見ようとすると、満月を背にしているため見ることは出来ない

声の主はさらに話を続ける

「間もなく……」 終わりが始まる”」

「終わり？ 始まる？」

「おぬしなら、止めることが出来る 《真血》のおぬしなら」

「《真血》？あんた何を言って……」

タツキの言葉を遮るように突風が吹いた

顔を上げた時には人影は姿を消し、静かな夜に戻っていた

（間もなくだ……）

07 終わりの始まり

「まずいなあ、だいぶ差つけられちゃったな」

タツキが謎の人物と出会った頃、同じくハテノタウンを目指す者がいた

「ぼくなんかが師匠に付いて行けるわけないのになあ」

「澄王、喋ってる暇があつたら急ぎなさい 夜が明ければ世界中は混乱に陥ってしまいます」

もう一つ別の声がしてきたようだ

スオウと呼ばれたのはまだあどけなさも残る少年

だが彼の周りに人影は見当たらない

「わかってます、それでもめいっばい飛ばしてますよ」

飛ばしていると言う少年は、飛ぶよりはるかに早いスピードで草原を駆け抜けている

「金竜様、お体の方はどうなんですか？」

「まだ完治ではありませんが、だいぶ良くなりました」

「間に合いますか？」

「間に合わせます あなたは早く合流しなさい」

森に入ってもスオウのスピードは落ちる事無く巧みに木をかわしながら進んでいく

（おぬしなら止める事が出来よう……）

ベッドに横になりながら、タツキは昨夜の事を思い出していた

「終わりを、おれが止める……？」

いくら考えても訳の分からない話だ

今日もいつもと同じように、町は活気にあふれ大勢の人が行き交っている

とても何かが起こるようには思えない

太陽はもう真上まで昇っている

タツキは考えるのをやめ、稽古に向かった

稽古も順調に進み、太陽も夕日になろうとしていた頃――

「結局何も起きないか」

だが次の瞬間、下から突き上げるように、大地が激しく揺れた

「なっ……!!」

突然の衝撃にタツキは倒れこんだ

立ち上がるうにもあまりに揺れるため、掴まらなければ立てない

窓ガラスが割れ、壁の額が次々と落ちる中、壁に手をつきながら立ち上がった

「ど、どうなってるんだ!？」

外を見ると皆立っていられずしゃがみこんでいる

古い家屋は崩れ始め、悲鳴も聞こえてきた

「まさか、本当に……」

約二分間にもわたって揺れ続けたこの地震によって、多くの怪我人や家屋の倒壊、火災も発生した

この地震を境に、タツキとヒメノは、巨大な運命の輪に吞まれていく

「おい！もっと薬はないのか！？」

「誰か手え貸してくれ！」

町の広場には怪我人が集められ治療を受けている

その場にはヒメノの姿もあった

「どお、おじさん　少しは楽になった？」

「ああ、ありがとうヒメノちゃん」

それを聞くと、ヒメノは次の怪我人の所に走って行った

そんなヒメノを見下ろす二つの人影があった

広場近くの建物の屋根にいる、奇妙な仮面を被った白い装束の二人組

「あの娘か？」

「そのようだな　だが覚醒してはいないようだ」

「よし目標は確認した　夜まで待つぞ」

すると二人組は屋根を飛び跳ねながらどこかへ消えた

地震で破損した家屋の修復を手伝ったタツキは夜になって道場に戻ると軽く夕飯を済ませ、すぐベッドに横になった

そして深夜、ガタツという物音で目を覚ました

「ん……なんだ？」

目をこすりながら起き上がると、今度は声が聞こえてきた

「ちょっと！何すんの！？」

それは隣のヒメノの部屋からだった

タツキはベッドから飛び上がり、自分の部屋を飛び出し、ヒメノの部屋のドアを勢いよく開けた

「ヒメノ、どうした！？」

ドアを開け目に飛び込んで来たのは、窓から外に出ようとしている、白い服の二人組

一人はヒメノを抱えている

ヒメノは眠らされているのか、気絶しているのか、ダラリと両手足を下げたままタツキの声に反応しない

「なんだあんた達！ヒメノをどうする気だ！？」

「かまうな、行け！」

二人はタツキを無視し窓から飛び降りた

「くそっ！」

タツキもすかさず後を追う

二人組は、一般人より能力の高いタツキでも中々追い付けない速さで、静寂の町を駆け抜けていく

「なんなんだあいつら！」

二人組はついに町の出口まできた

「あの小僧しつこいな」

「おれが時間を稼ぐ お前はその娘を連れていけ」

「この速さに付いてくる奴だ 用心しろよ」

すると一人が向きを変え、背中に背負った短めの剣を抜き、タツキの方に向かってきた

「時間稼ぎか！」

タツキも剣を抜こうと腰に手をのばす

「ヤバッ！急いでたから丸腰だ！」

そんなことはお構いなしに、
「敵」

は眼光鋭くタツキを睨みながら、瞬く間に間合いを詰めてきた

「邪魔はさせん」

「は、早い！」

敵はほんの数歩で目の前まで迫ってきた

姿勢を低くしたまま懷に飛び込み、剣を横に屈いだ

地面に数滴の血が落ちた

「浅かったか」

タツキは驚異的な反射神経で後ろに跳んだ

「くっ……！おい、あんた！何が目的だ！ヒメノをどうする気だ！？」

「答える義理はない」

敵は尚も攻め続けてくる

武器を持たないタツキは防戦一方だ

「なんとかしないと！」

そんなタツキに頭上から敵の白刃が襲う

それをギリギリで躲すと、剣が下り切ったと同時にがら空きになった頭部へ回し蹴りを繰り返す

蹴りは側頭部に直撃し敵の体は大きく吹き飛んだ

「この手応えは……」

敵は何事もなかったかのように立ち上がった

「まともに食らっていたら危なかったな」

「当たる瞬間に自分から飛んだか」

（強い……でも急がないと追い付けなくなる）

するとその時、敵が何かを感じとつさに後ろに跳んだ

敵がいた場所には二本の短剣が刺さっている

「誰だ！」

そう叫び、飛んできた方向を見る

「あんたはあの時の！」

近くの木の上に立っていたのは、あの時タツキに不可解な言葉を残した白髪の女性だった

すると彼女は、木から飛び降り短剣を挟んで敵と向かいあった

「死にたくなければ、今すぐ去れ」

そう言いながら突き出した手を開いた

途端に敵の様子が変わった

「……！くっ！だが時間は稼いだ！」

敵は煙幕弾を叩きつけ、その場から消えた

煙幕が晴れたそこに立っているのは、確かにあの時の女性だ
振り返るとゆっくりと近づいてきた

「ケガはないか？タツキ」

「ちょっと腹を……ってなんで名前を……？」

「そんなことは今はどうでもいい」

「そうだ！ヒメノを追わないと！」

ヒメノを追い走りだそうとしたタツキは白髪の女性に止められた

「なんでだよ！？」

「無駄だ、追い付ける距離ではない　それに向かった先は分かっている」

女性はタツキに背を向けたまま、独特の口調で言った

「……あなた、何者なんだ？」

「私は光蘭　タツキよ、お前を迎えに来た」

振り向いたコウランを月の光がやさしく包む

その白い長髪は、風に揺れ、月の光を受けて美しく輝く

「終わりが、始まった」

08 決意の夜、旅立ちの朝

「迎えに来た？一体どうゆう……うつ！」

そこまで言いかけて、突然糸が切れたように崩れ落ちた

「毒か」

「体が動かない……」

いくら動かそうとしても指先がかすかに動くだけ

「アレは倭国の忍の者、武器に毒が塗つてあるのだ」

「倭国……忍……」

コウランが体の動かないタツキの前に立ち、問い掛ける

「分かつたろう、おぬしは弱い それでも助けたいか？」

「……どうすればいい？」

タツキは下を向いたまま静かに言った

聞かれるまでもなく、最初から答えは決まっている

「おぬしは力を持っている だが使い方を知らぬ、まずはそれを知ってもらう」

「了解 とりあえず動けないのなんとかして」

「少し待っておれ、私の連れが来る」

「連れ？」

「ちょうどいい 来たぞ」

コウランは振り返り、町の門から続く一本道の先を見た

それにつられてタツキも目だけ動かす

道の向こうから人影が走ってくるのが見える

そして地面を蹴って一気に飛び上がり、タツキの目の前に着地した

「だ、誰だ……？」

首が上がらないタツキには足元しか見えない

その頭の上で、話は進む

「遅いぞ、スオウ」

「師匠が早すぎなんです……で、この人ですか？」

「ああ、そうだ」

「そんな下向いて何してんですか？」

「毒にやられてな、体が動かない」

「おーいお二人さん、ちょっとちょっと！」

訳がわからずただ聞いているだけだったタツキは、ここでようやく話に割って入った

「今からスオウがおぬしの毒を治療する　おとなしくしておれ」

「治さんの？」

スオウは不敵な笑みを浮かべながら、手にした杖を体の前に構えた

そして目を閉じて集中すると、杖に見たことのない文字が浮かび上がる

「な、なんだ？」

文字が杖全体に広がると、ゆっくり杖から手を離す

「竜陣壱式……」

杖の文字が下へ動き始め、タツキを囲むように円を描いた

「竜の息吹」

スオウが唱えると円が激しく回転を始め、風が渦巻いた

「この風は……」

すこし経つと風は収まり、陣も消えた

「どうだ？」

「え……あ、動ける」

さつきまで指先しか動かなかったのが嘘のように、サッと立ち上がった

スオウは誇らしげに笑っている

「今は、なに？」

「《竜陣》っていう術です ぼくしか使えないんですよ」

スオウはさらに誇らしげに言う

「他にも種類があるんですけど、どうしてもって言うなら……」

言葉尻に重なるようにコウランが割り込んだ

「タツキよ、妹を助けだすと決めたなら、しばらくここには帰ってこれない 別れの時間がほしいなら、明日まで待つ」

別れという言葉に一瞬戸惑ったがすぐに冷静さを取り戻した

「そうだな……そうするよ」

「では明日の朝、ここで待っている」

そう言って二人は森の中に消え、タツキも町へと戻っていった

「じゃあみんな、そろそろ行くよ」

「頼むぞタツキ！絶対助けて来いよ！」

「タツキよ、疲れたらいつでも帰ってきなさい」

「ありがとう、みんな」

翌朝タツキは、みんなに昨夜の出来事を打ち明けた

みんな急な話に驚いたが、止める者はいなかった

「タツキ、これを持っていけ」

「大将、これは……？」

歩き出そうとしたタツキに、大将は一本の剣を手渡した

豪華な装飾がされているわけでもない普通の、鞘に収められている剣だ

「それはな、お前の親父さんの剣だ　お前が町を出る時が来たら渡してくれと頼まれた」

「父さんの剣……わかった、ありがとう」

「気を付けてな」

形見の剣を手に、タツキは歩き出した

声援を背に、振り向くことなく、ただ真つすぐ昇った朝日だけを見て

町を出てしばらく、昨日の夜コウラン達と別れた場所に来た

まだ二人の姿はない

「何してるんだ？」

二人を探して辺りを見回していると、後ろから声がした

「来たな、タツキ」

「あ、コウランさん」

振り向くと、コウランと重そうな荷物を持つスオウがいた

「タツキさん、その剣はなんですか？」

スオウがタツキの形見の剣を指差して言った

「ああこれは父さんの形見の剣だよ 出がけにもらったんだ」

それを聞いてコウランの眉がピクツと動いた

（ケンオウの形見！？ならばあれが…… なるほど本人のそばにあったのか）

「コウランさん、どうしたんですか？」

「…… タツキ、その形見の剣、片時も離すでないぞ」

「え…… あ、はい」

「では出発だ 目指すは《王都カサレリア》だ」

彼らは歩き始めた

奪われた平穏を取り戻すために

目的を果たすため、歩みを止めることはない

いずれその道が別れようとも、いずれその道が途切れようとも…

…

09 届かぬ手

王都カサレリア――

湖に囲まれた世界最大級の都市で、カサレリア騎士団の本拠地

切り立った崖の上に作られたこの都市に入るには、東西南北に架けられた橋を渡るしかない

今、その四つの橋のうち、西の橋を騎士の一団が渡っている

一団の先頭には、団章の付いたマントを風になびかせながら歩く、一人の男

その金髪の男は、門の前で停止の合図を出して止まった

「白帥騎士団だ 討伐の任務から帰還した」

男は凜とした態度で門番に言った

「はっ、お疲れさまです 開門！」

すると門の内側では二人の騎士が、開門用のハンドルを回す

大小様々な歯車が音を立てて噛み合い、見上げる程の巨大な白い門がゆっくりと開いていく

ある程度開いたところで門をぐぐり、中に入ると再び重厚な門が

閉じた

王都カサレリアは門と同じく四つの地域に分けられ、西部街は騎士達の住居が集まっている

男はそのまま街の中心にある、圧倒的な存在感で街を見下ろす王城へと向かった

一階の広間から《直通・玉座の間》と書かれた昇降機に乗る

昇降機を降り、通路を進めばそこはもう玉座の間だ

「陛下、魔物討伐の任務から帰還いたしました」

男は片膝をついて頭を下げる

「よく戻ったな、クオンよ」

「はっ」

「戻ったばかりで悪いのだが、新たな任務に就いてもらいたい コウマ頼む」

すると王の隣に立っていた初老の男が少し前に出てきた

男はコウマというこの国の大臣で、常に王の傍らにある側近だ

「先日、探していた《竜皇女》が見つかったのは知っているな？」

「はい」

「その時王都に護送する際に、賊の襲撃を受けたようだ 貴公には護送部隊と合流し護衛に加わってもらいたい」

「承知いたしました」

「では頼むぞ」

クオンは立ち上がり一礼して玉座の間を後にした

昇降機で広間に戻るとクオンを待っていた騎士がいた

「兄様、おかえりなさい」

「ただいま、シホ」

待っていたのはクオンの妹のシホ

彼女もまた騎士の一人として赤帥騎士団に所属している

二人は帰路の道すがら互いの近況報告をする

「任務はどうでしたか？」

「クリエンの周辺に出たという魔物の集団の討伐だ 楽な任務だったが最後にカオスが出てな、怪我人も出たよ」

「私達が調査していた遺跡にも出現しました」

「最近、目撃情報が増えたが、地震の後はさらに増えたな 二つは関連性があるのかもな」

そんなことを話しているうちに、二人の自宅に着いた

大きな門と頑丈な鉄柵に囲まれた家は、家と言うよりは屋敷のような大きさに、庭の中心しは噴水もある

クオンが門を開けて入っていく

クオン達の家は、代々一級の称号を持つ騎士を輩出してきた名家
彼らも将来を期待された身だ

「兄様はもうお休みに？」

「ああ 新たな任務が下つてな、明日には出なくてはならない」

「そうですか……朝にはお見送りいたします」

「ありがとう じゃあおやすみ」

「おやすみなさい」

その頃ハテナタウンを出発したタツキ達は、王都への道を順調に進み、一日目の目的地である《ルーベンス》に到着していた

「あー、疲れたあ」

宿の部屋に着くなりスオウがベッドに倒れこんだ

「スオウ、まだ半分も来てないぞ」

「ぼくは師匠とは違うんですよ」

そう言いながらスオウは起き上がる

「なあコウランさん、ヒメノを連れてった連中はどんな奴なんだ？」

「ん、あれはな……」

コウランは部屋の壁に貼ってあった世界地図をはずして机に広げた

「あれは倭国独特の《忍》という戦闘集団だ」

コウランは地図の端にある小さな島国を指差した

倭国は世界に二つとない独自の文化を発展させてきた国で、中でも《侍》や《忍》はカサレリア騎士団にも劣らない戦力を有している

「おそらく金で雇われたのだろう」

「なるほど」

（確かにあの時の動きは只者じゃなかったな）

「そついえば師匠、忍の連中はこの街通ったんでしょつか？」

王都へ行くには多くの場合、街道沿いにあるこの街を通る

森の中を通る旧街道は魔物が出るうえ、街がないため、今では使われなくなった

「うむ、そうだな スオウ、聞き込みしてこい」

（やっぱり言わなきゃよかった）

スオウがしぶしぶ出ていった後、タツキはふと形見の剣を眺めていた

鞘や柄の部分には、謎の文字が全体に彫られている

（この文字どこかで見たような……）

柄を握り力を込めるが強い力で押さえられているかのように、いくらやっても抜けそうにない

（ぬ、抜けない……）

それを見ていたコウランは、剣を取るとまじまじとその文字を覗き込んだ

「読めるんですか？」

「いや、読めるわけではないが、どうやら《竜刻語》……ドラゴンロアーと呼ばれる物だな」

「へえー、でもなんで抜けないんですかね？」

「おそらく結界が張られているんだろう」

剣を返すと、コウランは何か考え込んでいるようだった

（《エンフリーデ》……運命の子、《ロウルス》……息子　やはり
タツキなのだな）

思いに耽っていたコウランの耳に、バタバタと階段を上がってくる音が聞こえてきた

壊しそうな程の勢いでドアを開け、帰ってきたスオウは激しく息を切らし、変に興奮しているようだ

「スオウ、どうした？」

スオウの慌て様に驚いたが、冷静に声をかけた

「怪しい白服の男二人と！女の子が！たった今！船で港を出たって
！」

気が付くと形見の剣を握り締め、先程のスオウを超える勢いで部屋を飛び出していた

宿で休んでいる間に、ヒメノ達は海へ出てしまったのだ

（街に着いてすぐ探していれば……！！）

のしかかる重い後悔を背負いながらも、飛び出した足は決して止まることなく、港へ走る

「おい兄ちゃん！船はもうないぞ！？」

係員の声も聞かず、ゲートを飛び越え港に入った時には、船は沖数百メートルにあった

（ヒメノ……くそっ！）

立ち尽くすタツキを後悔の念はさらに重く、押し潰そうとする

船は徐々に見えなくなる

そこへコウランとスオウが追い付いた

「間に合わなかった！」

スオウはタツキと並び遠ざかる船を見つめ、コウランは係員に船の行き先を聞いていた

目に映るあの船に、ヒメノが乗っている

伸ばした届かぬ手は、虚しく空を掴むしかなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979a/>

姫と竜

2010年10月21日22時33分発行